

「会員短信 86」

「良寛の俳句」

柳村光寛

生涯身を立つるに懶(ものう)く 騰々(とうとう)として天真に任す
囊中(のうちゅう)三升の米 炉辺一束の薪
誰か問はん迷悟の跡 何ぞ知らん名利の塵
夜雨草庵の裡(うち) 双脚等間に伸ばす

これは良寛（一七五八―一八三一）の代表作の漢詩である。なんと悠長な事とおっしゃる方も多いだろう。すべてを金や数字で価値判断、評価をする現代の考え方と正反対だからである。

良寛は、新潟県三島郡出雲崎町の名主・橘屋に、四男三女の長子として生まれたが、十八歳で出家する。二十二歳から岡山県の円通寺で修行に励んだ後、三十五歳頃に生地越後に戻って、五合庵などの草庵で心を磨き、孤独と清貧を楽しむ。漢詩や和歌、書に秀で、七十四歳で示寂した。五合庵は、私の住む長岡市から三十キロの山中にあり、「焚くほどは風が持てくる落葉かな」の句碑が迎えてくれる。生家跡、良寛堂の歌碑には「いにしへに変はらぬもの

は荒磯海(ありそみ)と向ひに見ゆる佐渡の島なり」がある。

良寛は、俳句を父の以南から学び、生涯に百句ほど詠んでいる。

新しいけやかはづとびこむ音もなし
鉄鉢に明日の米あり夕涼
夏の夜や蚤を数へて明かしけり
人の皆ねぶたき時の行々子
手拭で年をかくすや盆踊
屋根引の金玉しばむ秋の風
ぬす人に取り残されし窓の月